

ルイス・フーゴー・フランク

- 商品学の名物外国人教師 -

初代校長渡邊龍聖は、小樽高商に着任する直前は、ベルリン大学で遊学生活を送っていた。ヨーロッパでの商業教育をつぶさに視察した彼は、商品学の重要性を実感し、そのため小樽高商に、開校当初より商品実験室を開設した。この商品学を担当するべく渡邊に請われ、開校以来3人目の外国人教師として、大正2年はるばるドイツより小樽に赴任したのがL.H.フランクである。契約書によると、彼の待遇は月給450円、赴任費975円という内容だが、この報酬は恐らく校長をもはるかに凌ぐもので、約1万倍が妥当かと思われる現在の貨幣価値にあてはめても、破格の高給であることが分かる。(当時の教授の「年棒」が800円内外であった。)彼は元々ベルリン大学で博士号を取得した応用化学のスペリヤストである。従って実際の授業では、主に商品の化学的鑑定を教えていた。着任1年後に第一次世界大戦が勃発し、フランクは「敵国人」となってしまうわけだが、渡邊校長以下、学校は彼を庇護し、周囲との関係も非常に良好であった。ただ、戦時下であるドイツに帰国することも叶わず、当初3年間であった高商との契約は、13年間も継続し、結局彼は36年に互り日本に滞在することとなる。

ドイツ語訛りの英語で授業を行い、合間に化学の専門用語がポンポン飛び出す彼の授業は学生が皆目理解できず、後で日本人教授が改めて説明したこともあったらしい。しかし、そのユーモア溢れる正に「フランク」な人柄は学生に慕われ、大正11年の北海道行啓の折、高商を訪問した皇太子殿下(昭和天皇)は、自ら握手と共に彼の労を特別にねぎらわれている(その際、殿下には高商石齋が献上された)。フランクは大正15年に小樽を離れ、山梨高等工業学校(現山梨大学工学部)に移るが、その最大の理由は、子供の教育にあったと伝えられている(当然の如く、インターナショナル・スクールは当時の北海道にはなかった)。山梨高工でのフランクは、電気化学、電気材料を担当する外国人教師として、本来の能力を存分に発揮し、加えてドイツ語も教えたため、小樽にも勝る感化を学生に与えた。山梨大ではフランク生誕100周年にあたる昭和61年に、工学部構内に記念碑を落成している。高商・高工時代は平穏で実り豊かな生活を送った彼も、第二次世界大戦勃発と共に、ユダヤ人故に学校を罷免され、スパイ容疑で拘



ルイス・フーゴー・フランクの肖像レリーフ
このレリーフは、昭和61年に山梨大学の教員が記念碑とともに2体制作したもので、遺族の希望もあってその1体が本学に寄贈されたものである。
(本学史料展示室所蔵)

留された長男は獄死するなど、波乱と苦悩の生涯を送った後、昭和48年にアメリカ・サンフランシスコで没した。フランクは、これまで余り脚光を浴びることのなかった研究者であるが、同時期に小樽高商で教鞭を取った田所哲太郎(元北大教授、帯広畜産大学・北海道教育大学学長)、小原亀太郎(元名古屋高商教授)らと並び、日本における商品学の実質的創始者といえよう。また、小樽高商が単独大学昇格を果たした際の大きな理由として、社会科学系学校でありながら充実した実験施設を有していた点が挙げられる。それがひとえに商品学の伝統によるものであったことを考えても、彼が小樽高商に多大な貢献を成したことは論を待たない。

L.H.フランク [Louis Hugo Frank] 略歴

明治19年6月2日	ライプチヒに生まれる。
同42年	ベルリン大学化学科より学位授与(優等)。
大正元年	アミ・ルーシー・フィッシャー(英国人)と結婚。
大正2年	来日。小樽高商商品学担当外国人講師。教え子約500人。
大正4~6年	長男フーゴー、次男カール誕生。
大正15年	山梨高工に移籍。電気化学、電気材料、ドイツ語担当外国人講師。以降昭和末期に至るまで、同校唯一の外国人講師であった。教え子約2000人。
昭和11年	永年の教育功績により、勲五等瑞宝章を受ける。当局の監視徐々に強まる。
昭和18年4月30日	ユダヤ系故に実質的に職を罷免される。横浜に移住。
昭和19年 ?	長男は箱根に、他の家族は軽井沢に収容される。
同年7月	長男、スパイ容疑で横浜に拘留(無実)。住宅は戦災全壊。
昭和20年6月30日	長男、獄死(餓死)。軽井沢外人墓地に葬られる。戦後、一家は横浜に移り、フランクは進駐軍のアーミー・スクール教師となる。
昭和24年	渡米。サンフランシスコに住む。
昭和29年	米市民権を得る。アーカンサス州フィランダ・スミス・カレッジ教師
昭和48年10月8日	サンフランシスコにて逝去。享年87歳。同市郊外の墓地に埋葬。

参考文献：山梨工業会会報第63号「フランク先生特集号」